



Title	リスク社会をめぐる人文社会科学の超域的枠組み構築へ向けて
Author(s)	滝澤, 克彦
Citation	多文化社会研究, 5, p.305; 2019
Issue Date	2019-03-18
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/38920">http://hdl.handle.net/10069/38920</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-20T15:29:10Z

# 特集：リスク社会をめぐる人文社会科学の 超域的枠組み構築へ向けて

長崎大学 滝澤 克彦

## 特集の趣旨

現代世界におけるリスクは極めて多くの要因が複雑に絡み合い、ますます予見不可能なものとなっている。様々なレベルの社会的カタストロフィが現実味をおびてくるなかで、それを回避するために人文社会科学はどのような貢献ができるだろうか。本特集は、このような課題にとりくむ長崎大学第三期中期目標・中期計画における重点研究課題「[リスク社会]を生き続けるための人文社会科学の超域的研究拠点形成」においてなされてきた共同研究の成果の一部である。

かつて社会学者のU・ベックが指摘したように、近代における産業化の帰結として到来した「第二の近代」は「リスク社会」として特徴づけられる。そこでは、モダニティの持続的な発展および産業社会の存続可能性自体が、その前提としてリスクを内包している。そして、そのリスクはグローバルで多層的な連関をもつため、極めて不確実かつ予見困難なものとなっている。

このようなリスク社会においては、実際には現代社会における科学的な営為自体、価値・倫理・信仰などと分かちがたく結びついている。なぜなら、「幸福な生活」自体がすでに科学技術なしには成り立たない状況において、それを脅かすリスクの回避が科学的使命となるため、「幸福とは何か」についての哲学・倫理・宗教的命題自体が必然的に科学的なかに組み込まれるからである。それゆえ、そこで生じる問題は本来的に文理の枠を越えた領域に位置づけられなければならないはずである。

本特集では、以上のような観点を踏まえつつ、リスク社会の全体像のなかに社会学、宗教学、比較政治学、家族社会学、経済学各の分野における「リスク」の位置を捉え直す。そこでは、主に、ある特定のリスクが自明なものとして設定されること、および、その回避が科学の自明な使命として設定されることが批判的に検討される。これは、リスク社会において、人文社会科学領域が提起しうる最も重要な課題の一つであると言えるだろう。